

〈学習院大学史学会第十二回大会記念講演〉

中華の形成と東方世界

鶴間和幸

今日は専門の方だけでなくいろいろな方がいますので、できるだけ分かりやすい話をしたいと思います。「中華の形成と東方世界」と題目は聞き慣れないかもしれませんが、要するに今までの中国古史の総括と展望をこめたものです。中国古史ではどのように研究がされてきたのかといいますと、一つは文明の発生は黄河流域であるという、黄河文明一元論です。二つには、そういう黄河文明から出発し、やがて一つの巨大な帝国である秦漢帝国が形成される歴史の流れを明らかにしてきました。この二つの流れは、黄河文明からやがてその秦漢帝国へ移っていくものとして結びついています。そして三つ目の研究史の流れは、そのような秦漢帝国は中国史上、最初の統一帝国であり、やがて隋唐帝国も含めた統一帝国へと継続してつながっていきますが、そういう中国王朝を中心として、我々日本も含めた東アジアという一つの国際世界が形成されていくことが指摘されてきたことです。以上のような三つ、すなわち黄河文明論、秦漢帝国論、東アジア世界論を核にして、これまでの中国古史研究は行われてきたと思います。今日はそういう従来の流れから、

もう一歩先ほどのような世界、歴史像を作っていくべきかという話を、一時間ばかりのうちに進めていきたいと思っています。

新しい中国古史研究

結論からいいますと、現在では三者を越え、またあるところではそれを否定するようなものの方が出されていることです。つまり第一には、最近中国で数多くの新石器時代の遺跡が発見され、黄河流域だけではなくて、南方の長江の流域を含めて様々な文化の存在が確認されていることです。ですからもう中国の考古学者の間では、中国の文明発生は多元であることが、もう常識になっています。たとえば黄河流域、長江流域のほかに、東北に遼河という河がありますが、その少なくとも三つの流域に異なった文化があると見られています。そしてまた例えばその長江であれば、上流・中流・下流といくつかの地域に地域文化が認められ、中国文明というのは決して黄河文明だけではないとされています。それから第二の新しい研究の動きは、私自信も行ってきた仕事ですが、「中国の統一」

って一体何だろうかという疑問への取り組みです。紀元前二二一年に秦の始皇帝が全国を統一しますが、それによって中国というのはいつの国として実際にまとまったのでしょうか。文字の統一、度量衡の統一、そして郡県制という直接支配の体制によって中国は一つにまとまったのであるととらえられているわけですが、一体事実なのでしょうか。形は統一であっても、実態を見ますと、中国はもっと下の地域の集合とでもいえるのではないかと思われまふ。そういう面を統一への懐疑と私は資料に書きまふしたが、統一権力の理念と実態、つまり実態を見ていくということは、統一という一に對する懐疑を持って歴史を見ていくということです。そして第三の動きは、新石器時代の遺跡も含めて様々な同時代の史料が出土していることによって歴史の読み直しが始まっていることです。今日も二つほどご紹介しますが、それによって今まで見えなかつた世界が見えてきたわけですからそういう新しい三つの研究動向をふまえて、「中華の形成と東方世界」という話を進めていきたいと思ひます。

『史記』への四つの懐疑

今までの中国古代史でその核になっていたものは『史記』の記述でありました。司馬遷の『史記』に基づいて我々は中国の古代王朝の歩みというものを理解してきたわけです。今まで『史記』から古代史を描いてきましたが、それに対して四つの疑問をぶつけてみたいと思ひます。一つは司馬遷が生きていた時代、今日はレジュメの方は文章だけです、地図や多少の年表をOHPを使ってお話し

していきたいと思ひます。ここに夏から始まる王朝の年表がありますが、中国で初めて統一されたのはこの秦、西漢、東漢と書いてある時代です。漢という帝国の時代、そして秦というのはその前のわずかに十五年ですので、この隙間には実は秦帝国という非常に細い間隔があります。ですから中国で最初に統一されたのはこの黄色の部分で示された秦漢の時代です。それからその前に戦国時代という時代があります。司馬遷が生きた時代は統一されたこの前漢の時代です。ですから彼の立場は統一に至る歴史を体系的に書こうとしたわけですが、つまり五帝の伝説の時代から始まり、夏、殷（商）と書いてありますが、周、そして春秋戦国時代ですが周の権威が続いていて周に含まれますので、王朝でいえば周から秦というような王朝の変遷をたどって漢に至るというその道筋を描いたわけです。彼はその前の秦という時代の統一されたということが高く評価し、つぎに秦を貶めて十五年で崩れた原因を述べ、前漢という時代に至るととらえました。その前漢の時代には上古ということがありますが、古いひとつの時代がおわつたという感覚です。われわれはこの司馬遷の史観によって漢の時代に上古という時代が終わり、つぎの時代に変わっていくという一つの歴史の変わり目を求めていますけれども、果たしてそれでよいのかというのが一つの疑問点です。

それから二つ目は二十世紀に様々な考古学的な発見がされたことに関連したことです。甲骨文字の発見に始まって、殷墟の発掘、そして最近でも様々な重要な遺跡があって、何が出てくるかわからないという非常におもしろい状況なんですけれども、そういう新しい発見がありますと、まず『史記』に戻って『史記』にはどう記載さ

れているのかをすぐに考えます。そして、遺跡が『史記』の記述と一致していれば、司馬遷の記載がいかに正しかったかというものの見方をします。つまり『史記』に書かれた王朝交代史が、一つの歴史をはかる尺度、物差しのような役割をしているわけです。まあそれはやむを得ないこともあります。気がつけるべき点は気をつけていかなければいけません。つまり『史記』に書かれていなかった世界が、実は出土資料から数多くわれわれに訴えかけてきているのです。

それから三つ目の問題は、われわれがアジア、そして中国の古代をみるときに、やはりヨーロッパ人の物の考え方に非常に左右されてきたことです。最近オリエンタリズムという言葉が強調されまされども、「アジア」というのはもともとヨーロッパからみただの西アジアの地域でありました。当然中国は含まれていません。次にヨーロッパ人の知識が深まっていくにつれて、「アジア」という世界が中国、日本にまで最終的に行き着くわけです。そしてそれらがそのアジアという世界がどういう世界であるのかというときに、たえず自分たちのヨーロッパと対比して考えてしまうわけです。つまりもうすでにギリシャのヘロドトスが歴史を書いたときから、ヨーロッパは自由であり、アジアは、またはオリエントと云っていいかもしれませんが、これは専制の国であるとしてしまいます。ペルシャの時代からもうすでに、アジアは専制だという意味づけがなされ、そのあとの時代にたえず拡大していきます。ですからわれわれが中国史、中国の古代をみるときにそのヨーロッパ人の物差しに非常に左右されて、中国古代は専制権力、専制王朝である、非常に

権力が皇帝に集中した国家であるというものの見方、そしてその下には共同体という社会、これはアジアの共同体と言ひマルクスの言葉からきていますが、そこでは個が自立していない一つの狭い村落社会であると思われています。そういう枠組みで中国の古代を考え、『史記』を読みながら、『史記』のなかからそのような世界を見つけていこうとしてみました。果たしていつまでもそういうことをしていいのだろうかというのが三つ目の疑問です。

そして四つ目は、これは非常に大きな問題であります。ここに中国の現在の地図を掲げておきました。漢民族以外を少数民族と現在の中国は言っていますが、その少数民族の区域である自治区あるいは自治州の地域を除いた部分は赤の斜線で示してあります。これがよくいわれる漢族の伝統的な地域です。戦前の日本人は東洋史研究の中でこの斜線で引かれた地域、全部で十八省あります。この地域を支那と呼んで来ました。東洋史研究というのは、実は支那あるいは支那本土を中心に研究され、チベットや新疆ウイグル、モンゴル、東北三省は除かれていました。中国人自身も漢族の伝統的な居住地ということで、この地域を特別に考えてきました。歴史を遡ってみますと、この緑色で重ねあわせました二千年前の漢王朝の領域には重要なわけです。ですから多くの人は、その漢族の伝統的な居住地はすでに二千年前に成立していたのだと見て、中国の歴史をとらえます。そして漢の前の王朝、最初に統一帝国をつつた秦の領域をさらに重ねてみますと、若干狭くはなりますが、これが秦の領域です。当時漢族という言葉はありませんが、これも漢族の伝統的な地域に重なります。ですから、秦や漢の歴史を説き明かすと

いうことは、漢族の歴史の始まりを明らかにすることにつながってきます。現在の中国の伝統的な漢族の居住地がいかに一つにまとまっていったのかということも明らかにできるわけです。ところが、ここに重要な問題がありまして、近代の中国人やわれわれが呼んでいる漢民族という概念は一体、古代において成り立つのかということです。この百年の東洋史研究のなかでは、それがもう前提のように、支那本土とその周辺の民族を分け、中華民国の時代には五族共和という言い方がされ、漢族と満族、チベット、モンゴル、回族とを分離してしまいました。はたして秦や漢の時代にこの漢族という一つの概念というのがあったのでしょうか。このことがあまり問われずに最初から、二千年前に遡っても漢族の伝統的な居住地がこの地域だということに考えてしまいました。私も実はそのように長いこと考えてきたのですが、最近の出土文物を見ますと、どうもその概念を変えなくてははいけません。これが四つ目の問題です。そのことはまた後で触れます。

ですから、従来の中国古史研究は、ここ近年の新しい動向によって大きく変えていかなくてははいけません。その大きく変わった中国古史像というのが、まだいろいろな研究者の間で進められている最中でありますので、やがて近いうちいろいろな研究が積み重なって新しい方向が出てくるだろうと思います。

中国古代の三つの地域

中国古代の歴史を解く鍵として、私はかねてから地域という言葉を使ってきました。中国には、三つの異なった段階の地域があった

と思います。地域というのは非常に曖昧な概念であり、国家と地域あるいは社会と地域というように自由に使っています。また人によって使い方も違いますし、それからいろいろな学会でも、地域とか地域社会というテーマを挙げれば、何でも包み込むような、また何を報告しても成り立つような便利な言葉でありますけれども、でも地域ということが重要であればこそ、中国古代での地域の概念をはつきりさせなければなりません。私もよく鶴岡のいう地域というのはよく分からないと言われるわけですから、今日はあえて恥を忍んで、三つの地域という提言をします。三つの地域というのは何かと申しますと、国の大きさ、社会の大きさ、分かりやすい言葉で申しますと、中国古代の人々が生きていた集団の大きさというものを少し問題にしてみました。

先ほど前漢時代の領域の地図を挙げましたけれども、実はこの領域の中に、赤い点が一〇三ほどあります。前漢の末に、戸籍の調査が行われて、全国の人口が五九〇〇万という数値がはじき出されています。この一〇三の郡や国の下には、一五八七の県があります。

日本の行政組織と違い、郡が上にあって県が下にあります。そうすると、最初の地域というのは、実はこの地図には一〇三しかないですが、さらに細かく一五八七の点で表されるその点が、まず中国人にとって最初の第一段階の地域であろうかと思えます。おそらく、新石器時代に遡ってみると、集落が形成され、人々は集団で住む社会をつくっていきませんが、それがやがて集まって都市というものを形成します。その都市の基盤になっているものが最初の地域というように名付けておきたいと思えます。中国古代の人々が考える県

というものは、百里四方、だいたい四〇キロですが、人々が実際に生活して、自由に行き来できる空間、それが県であろうと思います。そして、中国の古代の人々は、そういう県を一つの城壁で囲み、城壁の民として生活します。そして、その城壁には、社稷と宗廟、つまり土地の神とそれからその集団の先祖を祭る宗廟というものがあります。社稷というのは、やがて、土地の神から国家を表す言葉になりますけれども、ここで私が言う国家は、いわゆる近代の概念としての国家ではなく、中国固有の伝統的な国家ということでしょう。使っていくります。ですから、これが春秋時代のあるいはそれ以前の殷周時代の一つの国家なんですね。分かりますか。言え、都市国家と言ってよいかも知れませんが、それから、中国の邑という言葉がありますけれども、邑制国家と言ってもよいかも知れませんが、あるいは、最近はいろいろ早期的な国家であるとか、原始的な国家であるとか、人によっていろいろ使っている方がありますが、最初の地域というものは一つの都市から始まったものと考えられています。それは、孔子が描いた一つの郷党社会であり、それから老子の言葉に、小国寡民という言葉がありますが、つまりその都市に生きる農民達は一生その都市から離れることがない、隣の都市の生活のにおいや音を聞くことがあっても、お互いに往来しない、そういう世界ですね。小国寡民とは少し理想的な表現ですけども。またたとえば、春秋時代に衛という国がありますが、衛という国はやがて北方の狄という民族に滅ぼされ、彼らが移民して移って新たに作った都市は七三〇人という、わずかばかりの国をつくりました。ですから、まさにその小国寡民というのは、農民の集落も含むかも知れま

せんが、非常にその小さな点という地域の中からつくった国家だろうと思います。それがやがて広がって、人々の生活範囲が広がる中で、戦国の時代へ入っていくわけです。

この点である県を結び付けるのが郡であります。分かりますように緑で四角で囲ってある、あのぐらいの、まあ郡にも沢山ありますが、いくつかの県を合わせた行政単位が郡であります。近年、一九九三年、江蘇省のこの地域、ここに東海という郡が置かれていましたけれども、前漢の末の上計文書という、つまり毎年地方の政府が中央に一年間の県、郡の行政を報告する文書、これを中央に年度末に差し出しますが、その文書の複製、コピーが発見され、具体的にその郡の様相がわかることになりました。私の話は時代が春秋だとか漢だとか秦だとか飛びますけれども、もともとの、春秋あたりまでの都市が、やがて戦国の領域国家がつけられても県として生きています。ここでお話しするのは前漢、統一帝国ができてからの郡の話ですが、そういう文書のなかに、東海郡は東西五五里、南北四八里とあります。簡単に換算しますと、東西が二二〇キロ、南北が一九五キロという範囲におさまります。漢という王朝の全体の領域は『漢書』地理志に出ており、その一〇三の郡の一〇三分の一に当たる郡の具体的な人口、面積、役人の数が示されています。すなわち二二〇〇人ほどの役人が一九五万人の人口をかかえていたこの郡の行政に携わっており、このような具体的な様子がこの文書によってわかりました。最初はこの点で示される漢代の県、古く遡れば春秋以前の一つの都市、それが基本になって県という地域、都市が作られますが、やがてそれが郡というまとまりをもってきます。戦国

時代、お互いに軍事的な戦争が始まり、その時に拠点となるのが郡です。

そして第二の地域は、戦国の時代の地域ということができません。

戦国というのは、たとえばここに秦という国があります。越・楚そして燕・斉・趙・韓・魏と、この中山という国のうち、中山と越という国を除けば、戦国七雄という最終的な七つの国になります。私は今までの中国の古代史研究というのは、秦漢という統一時代、すなわち司馬遷の生きていた時代からものを見ていましたから、戦国というのは非常に分裂し、戦争でお互いに抗争していた時代であり、やがて彼らは中国に統一を求めて戦争したのだと、そしてまた戦国というのは非常に不便な時代であるのだと考えてきました。よく教科書に「秦の始皇帝が文字を統一した」、「度量衡を統一した」というときに、おそらく戦国時代は文字も異なっていたし、度量衡も異なっていたし、非常に不便な時代であったと考えられてきましたが、実は最近の研究ではそうではないのです。適正規模な国家というのは言い方はあいまいな概念ですが、戦国時代の国家というのは非常にその適正規模な地域に根ざした国家であろうと思います。第一の国家というのは都市、都市を中心として一つの国家が作られました。そうすると、人々が生活でお互いに活動出来る範囲、その地域に根ざした第一の国家が春秋国家であるならば、第二のそれがより拡大した戦国の国家というのも、実は地域に根ざした国家だろうということが出来ます。ですからわれわれは司馬遷の世界から考えますと、統一された時代から絶えず遡ってものを考えますから「戦国時代は戦争に明け暮れて大変な時代だった」と、また「戦国の民衆たちが

統一を願望して一つの国に移っていったんだ」というように考えていましたが、実はこの戦国時代にこそわれわれは中国古代史の視点を置くべきではないかと思っています。この戦国時代の秦・楚・越それから中山は、実はこれはもともと「中華」の国ではありませんでした。戦国時代、もちろん春秋時代にも「華」と「夷」の概念がありました。戦国時代こそ一つの国家が一つの国際社会を作っていくなかで「夏」という概念を作り上げてきました。秦の国というのはもともと西方の国でありましたので、かなり西方の遊牧系の文化を受け、中原の「中華」の仲間入りをさせてもらえない国でありました。それが一つの国際社会、「夏」というまとまりであったかと思いません。われわれ「中華」と呼んで、実は「中華」という言葉は、漢代にはこの「華」という字は用いていません。つまり「夏」という字を用いているのです。戦国時代に秦にとってみれば、彼らは中原から「夷狄」扱いされていましたが、やがて自分たちが「夏」の仲間入りをして、「夏」に入っていきます。そして秦はその「夏」という共同体を基にして一つの国を造り上げていきます。ですから戦国時代に出てくる、この「夏」というのが実は非常に重要だろうと思っています。

この第二の戦国国家の領域というのは「禹貢」の九州、それから『史記』の貨殖列伝、それから漢の時代に『方言』に出てくる言語の区域に相当します。厳密に戦国の国々の領域と重なるわけではないかもしれませんが、かなりその地域の領域につながるのではないかと思っています。やがてこの第二の地域というのは、「夏」という意識が生まれてくるなかで、戦国時代の人々によって「天下」という第三

の地域概念が造り上げられていきます。「天下」というのは、秦が統一する時に秦の始皇帝が各地に石碑を建てましたが、その刻石の中に「天下を統合する」という言葉があります。秦はこの一つの「天下」を一つの国にまとめていこうとしましたが、実は「天下」というのは本来は「中華」だけではなくて、「夷狄」という世界と「中華」との両方包み込んだ共存の世界が「天下」であろうかと思えます。

秦の始皇帝が各地に立てた刻石や『史記』の秦始皇本紀に、北の世界が「大夏」大きな夏、東の世界が「東海」、南の世界が「北戸」、西の世界が「流沙」という天下が示されています。「東海」というのは東の海、それから南は「北戸」、つまり南の家というのは北に向けて窓を作るといふ所から来たのでしょうか。それから「大夏」大きな夏、「流沙」は砂漠の世界。秦の帝国というのは、これは本来の天下とは違い、一つの読み換えだろうと思いますが、天下というのはこの四方の世界に囲まれた地域、そしてこの天下を一つの国にするというものです。これは秦の一つの理念でありますけれども、実は戦国時代の天下の概念は、華と夷の共存する世界であります。ですから秦の理念ばかりを追っていますと少し天下の概念を誤解してしまいます。先ほども申し上げましたように、秦という国は実は様々な戦国時代の国を統合しましたが、決して一色にはしていないのです。理念では天下を統合したと言いますが、実は戦国時代の様々な地域がそこに残存しているのが秦という国家だろうと思います。そういう天下という地域を、三つ目の地域として考えていきたいと思います。

東洋史研究・中国史研究の歩み

そのようにして今までの中国史研究を振り返って見ますと、ここ二百年の東洋史研究は明治の時に内藤湖南によって始まりました。彼はこの赤の斜線で囲ったこの地域で生まれた漢族の伝統的な文化が、周辺のこの赤の斜線の無い地域に広がっていく、それが東洋史だということのように考えました。それからもう一人の東洋史の創始者白鳥庫吉という学者は、北方の民族と南の民族との対抗史が東洋史であるという理解をしました。しかしその時に漢族という近代の概念をそのまま古代にも使っています。最近の新しい出土文書によりますと、たとえば張家山漢簡という文書が出しましたが、その中に「漢民」という言葉が出てきます。当時の言葉で漢人とは一体何なのかと言いますと、漢という国に戸籍に入れられた民を漢民と言い、秦という国の戸籍に入れられた民を秦人と言っています。それは決して民族ではありません。国家の戸籍に入ればすなわち漢人であり秦人となります。それから漢人・秦人という言葉は、秦漢帝国が崩壊した後にも周辺の国々からこの中国に住む人たちが呼ぶ呼称となっており残っていきます。民族ではなくて、漢という国に登録された民を漢人と呼ぶのであれば、中国には様々な民族がいても、戸籍に入ればもう漢人となる訳です。それがやがていつしか特に近代ですけれども漢民族、あるいは漢族というように読みかえられていきますが、実は血のつながりというよりは単に国家に登録された民のことを漢人と呼びました。

この百年の東洋史研究は、最初は漢族の中の文化の発展史、それ

から漢族と北の塞外の民族の交流史として実は始まりましたが、私
は東洋史研究というのは戦前と言いますか、もう二十世紀が終わり
ますので二十世紀前半と言ひ替えた方がいいかと思いますけども、
二十世紀前半の東洋史というのは実は非常に地域の概念があつたん
ですね。中国には色々な王朝の交代がありますけども、戦前の人達
は、民族を包み込んだ地域から歴史を解釈しています。ただそこ
には二つの問題点、つまり漢民族というのは実は近代の概念である
ということと、それからもう一つは、実は白鳥庫吉にしても内藤湖南
にしても南北という中国の地域差を考えるべきだという主張をして
いる点です。ところが二人のいう南北差は言っている意味が違いま
して、内藤湖南の場合にはこれは後の桑原隲蔵につながっていきま
すが、この支那本土を中央で区切る線、すなわち淮水という河が流
れてますけれどもこの淮水をはさんで北と南に南北という地域差を
見ました。つまり漢族の伝統的な居住地、支那本土にも地域差があ
つて、古代は非常に北に都が集中し文化も集中していましたが、や
がて次第に江南に移っていくという、国家の興亡史ではなくて地域
の発展史として内藤湖南はとらえました。それから白鳥の場合でも
東洋史における南北の差ということを書いています。彼の
場合には、中国支那本土を一つとし、北方の遊牧民族が北に当たり
ます。ですから白鳥の言う南北というのは、北の塞外民族と中国民
族の南北の区別、つまり漢民族と塞外民族の興亡史という観点があ
りました。

第二次世界大戦後、われわれは支那という言葉、支那本土とい
言葉を使わなくなり、中国という言葉に切り替えました。今までこ

の内藤湖南の場合に、この周辺の民族を除いた支那本土の歴史が東
洋史だと言ってきましたが、戦後はそのあるところは継承し、ある
ところは国家史に変えていきました。ですから戦後の日本の東洋史
研究というのは、中国の古代帝国がいかに形成されていくか、専制
権力がいかに形成されてくるかという問題を追究することが、戦後
の研究史の大きな流れです。私もそういう方向で中国の専制権力の
歴史を見てきましたが、そこでは本来戦前には柔軟に使われていた
地域というのが非常に小さなものになつて表に出なくなりました。
つまり、国家がいかに専制権力が形成されてくるという所に主眼が
あり、中国の地域の多様さというのがその中には見えなくなつてし
まった様な感じがいたします。ですからその国家史、あるいは国家
と社会という観点の中に地域というものを入れてもう一度整理して
いくべきだろうと思っています。

ヨーロッパ人の中国文明観

最近考古学では様々な遺跡が発見され、最初にも申し上げました
が、黄河文明一元論という見方は、中国ではもう多元論に変わって
いますが、そのことに関連してもう少し最後にお話しておきたいと
思います。

我々は中国をとらえる時にヨーロッパ人の立場を非常に尊重しな
がら歴史を見てきましたが、十九世紀に中国に入ったヨーロッパ人
はそこに非常に強い専制帝国を見いだしました。そしてそれが古代
から延々と繋がるという専制帝国であるということを彼らは見て取
りました。昨年私は陝西省をずっと回りましたが、そこはいわゆる

黄土高原の地域、そこにもヨーロッパ人が入り、黄土が非常に肥沃であるという考え方が出されました。つまり世界の四大文明の一つが黄河文明であると言っていますが、その黄河文明の肥沃さというのは黄河にあるというように彼らは考えました。リヒトホーフエンという学者は、最初はヨーロッパ人が中国に入った場合に考古学的な発掘ができませんでしたので、地質学的な黄土の調査をやってきました。その時に、シルクロードという言葉の命名者であるリヒトホーフエンは、中国に入った時につぎのような言い方をしています。黄河という河は、ちょうどナイル河の河畔のように非常に豊かな世界であると、そしてナイル河と同じように、この中国の黄河は毎年平地に氾濫し、そこに細かな物質からなる新しい層を沈澱させていったと。これが黄土のエキスであり、非常に豊かな土壌であること、そしてそこに中国人は小麦や大麦を蒔いて収穫したのだと言っています。ヨーロッパ人はこの中国の黄土を見て、四大文明の一つの黄土高原の肥沃さの理由はどこにあるのかというときに、彼らが最も身近であったナイル河という世界と重ね合わせて見ているのです。

リヒトホーフエンはその旅行日誌のなかで、実は一つの中国の書物を引いています。それは『禹貢』という書物です。これは戦国時代におそらくまとまってきた書物だろうと思いますが、『禹貢』という世界、ここに九つの青いものが貼ってありますが、『禹貢』というのは、夏の禹王に託して、禹が非常に氾濫が起こって天にまで水がみなぎったときに、それを鎮めていくという話があり、同時に全国を九つに分けて九つの土地の評価を行いました。中央に貢ぐべ

き貢ぎ物の内容を定めるわけです。もちろん、夏の禹王が出てきまされども、実は戦国時代の状況を反映しています。あるいは漢代の状況という人もいますが、この中で非常に評価されたのは雍州という土地です。現在の陝西省の黄土高原の地です。そして土地評価が低いのは、この南の長江流域、河がだんだん下るに従ってその土地の肥沃度も低いという評価をしています。われわれから考えれば、この江南の地域、この辺は気候もいいですし、最近では非常に早い時代から稲作遺跡が発見され非常に肥沃であったと言われていますが、『禹貢』の記述はむしろ、内陸で、しかもこの西北の黄土高原の地が最上の土地のランクであると言っています。これはおそらく、『禹貢』の時代の陝西省のこの地域に、周にしても秦にしても漢にしても都を置いたわけですから、その人たちの感覚からすれば非常に肥沃であったというように考えられたのでしょう。このようにリヒトホーフエンは、この『禹貢』という伝統的な中国の固有の書物を挙げ、この黄土高原の地が一番豊かであるんだというための一つの史料として引用しました。ヨーロッパ人は、この中国という世界、専制帝国という非常に巨大な権力であり、そしてまた豊かな黄土の世界があるという説明をしました。その時に、伝統的な中国の書物を引用して説明していきまされた。われわれはそういうヨーロッパ人の見方に基づいて黄河文明と言ってきましたが、実はそれは一つのヨーロッパ人の文明史観であり、彼らの立場から作られてきたものであるわけですから、最近様々な遺跡が発見されてくるなかで、見直していかなくてはいいけないと思っています。

統一と地域

それで最後の提言をして終わりたいと思いますが、先程三つの地域は時間の加減で説明し切れていないところがありますが、この東方世界という視点にふれておきたいと思います。今までわれわれはこの中国という世界を、冊封体制論という中国を中心とした世界の立場で考えてきました。あるいはヨーロッパ人が生み出したアジア観、それは黄河文明が非常に豊かな四大文明の一つであり、そしてマルクスのなかから出てきた考えですが、四大文明はアジアの乾燥したベルト地帯から生まれた文明であり、そこでは治水灌漑が重要ですから、それを行うなかで巨大な専制権力が生まれてくるというように、一つのヨーロッパ人の目から見た、外から見た中国像から考えてきました。また一方で、秦の始皇帝の時のように、中国という世界は自分達の国が中華であり天下を統合するという理念が出てきました。我々はその統一された中国を前提にもものを見るのではなく、地域から迫っていききたいのです。もう一回先程のこの色付きの年表を見ていただきます。中国経済史を研究された加藤繁が「中国の統一と分裂」という少し古い論文の中で、中国の歴史というのは統一と分裂の繰り返しであり、その分裂と統一は一对三の比率の年代の開きがある。そして彼は統一こそが中国を安定させる時代であり、その間にあるこの赤く塗られた時代は分裂の時代であり、それは非常に不正常な状態であったと言っています。今までの中国古代史というのは絶えずこの統一からものを考えてきましたけれども、その前にあるこの戦国という時代に少し視点をずらしてものを見て

いきたいのです。私自身統一像の再構成という仕事をしてきましたけれども、決して中国の個々バラバラな国々が同じ一つの制度を願望して統一が出来たのではなくて、実はこの戦国時代の国家の間の国際的世界、中華という世界のなかに、何か中国の地域に根差したエネルギーというものがあるのではないかと思うのです。ですから加藤繁が不正常な時代であると言った分裂時代というのは、言葉を変えて言えば地域の時代であり、地域に根差した国家の時代であると言えるのではないのでしょうか。ですから中国という社会は統一というところから見るのではなくて、様々な地域の集合であり、地域がいかに多様性を持っていたのかということから見て、その上で一つの国にまとまった理由は何なのかということをご古代史においては見ていかななくてはいけないと思います。「中華の形成と東方世界」というタイトルについては、今まで私は「中華帝国の形成」というテーマで仕事をして来ましたが、中華帝国ではなくて「中華」という戦国時代の一つの求心的な国際関係世界がいかに出来るのかということを追求めていくのが次の古代史のテーマではないかと思えます。それから「東方世界」、これは見慣れない言葉で説明しきれないですけども、中国人は中国を中心とした中華主義として自分達の国を考えてきました。また日本人は中国という世界をヨーロッパと対比して、ヨーロッパ人の概念の中から中国を考えてきましたけれども、そういう「外から見た中国像との決別」、決別してどこに行くのかは分かりませんが、中国という世界を冷静に位置づける意味で、ユーラシア大陸の海に面した東方の地域ということで東方世界という概念を使いました。時間の加減でそちらの方

を十分説明出来ませんでした。私がいま苦悩している話を今日は
お話しました。少しまとまりきれない所があったでしょうが、参考
にしていただけだと思います。